

企画展「松江藩と絵図」関連ミニ展示 会期：令和4年（2022）3月1日～4月3日
会場：松江歴史館 展示ホール（展示室前）

旅と地図を広めた木版印刷 – 『出雲神社巡拝記』とその版木 –

天下泰平の世となり、街道や航路が整備された江戸時代後期になると、遠隔地の著名な寺院や神社を参詣する人々が増えていきます。また、版木をもとに印刷する木版印刷の技術も向上し、全国的に出版事業が盛んに行われます。このように、旅と出版の文化が発展し成熟する中で、人々を旅へと誘い、旅の手助けとなる旅行案内書（ガイドブック）が刊行されるようになります。

松江藩では、明和4年（1767）の御立派改革以降に倹約が励行される中、文化2年（1805）から領民の他国への寺社参詣を全面的に禁止する措置がとられます。その一方で、出雲国内の寺社参詣は盛んに行われました。こうした人々の関心に応えるように、文化11年（1814）に『出雲札所観音霊場記』が、天保4年（1833）に『出雲神社巡拝記』が、国内巡礼のガイドブックとして出版されました。

『出雲神社巡拝記』は、主に『出雲国風土記』に記載された松江藩領内にある399の神社を取り上げて、神社名・祭神・由緒などを記しています。領内を順に巡って参拝できるように、松江を発着地として神社を列記して、次の神社までの距離も示しています。

天保4年（1833）の冬に刊行されており、編者は渡部彝、版木の彫工は京都の井上永辰、販売は松江石橋町の小笹屋良兵衛と同京店京橋詰の岡田屋重蔵が担当しました。なお、編者の渡部彝と販売担当の小笹屋良兵衛は同一人物です。

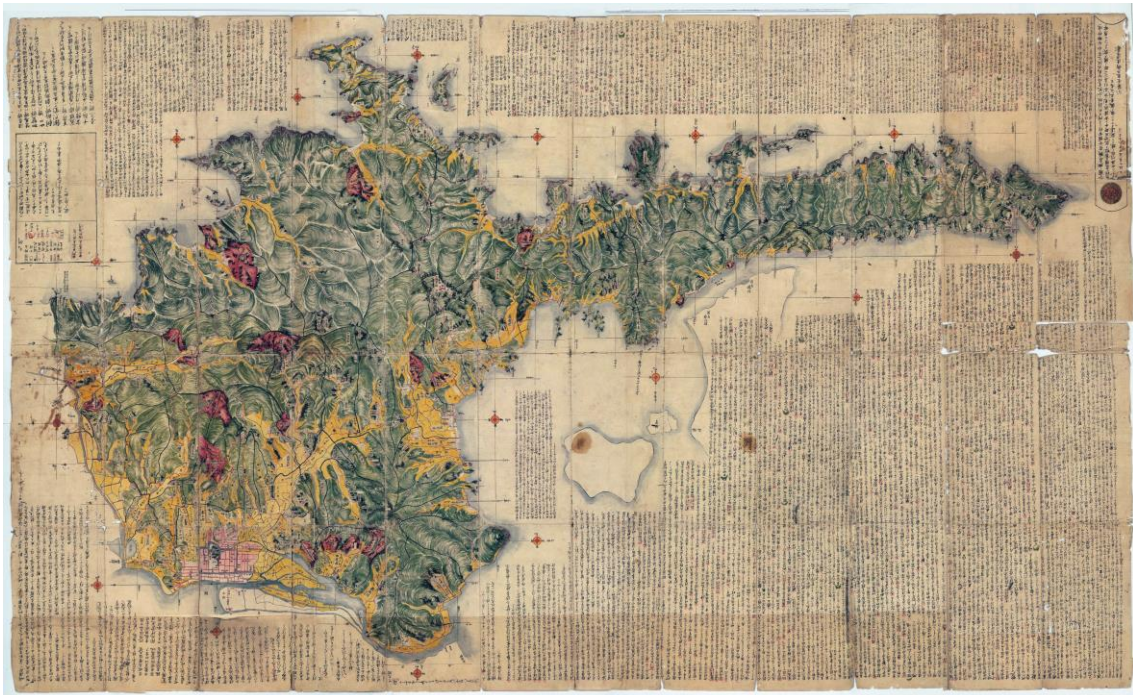
渡部彝は、松江藩家老の三谷権大夫や乙部九郎兵衛から資金援助を受けて、藩領内の神社の由緒を調査しています。国学者である岡部春平の『出雲国風土記』研究の現地踏査にも協力していて、『出雲神社巡拝記』には岡部の考えに基づく国引き神話当時の出雲国の想像図が描かれています。

さらに、渡部彝は文政7年（1824）に詳細な地誌情報を記す「島根郡絵地図」（写真パネル）を作製しています。出雲国内の地誌に対する彼の高い探求心がうかがえます。

この『出雲神社巡拝記』の木版印刷に使われた版木75枚が現存しています。この版木の多くは、その両面に文字を刻んでいます。このような木版印刷の技術により出版事業が盛んになり、地図も数多く刷られて普及していきました。



出雲神社巡拜記の版本と版木（松江歴史館蔵）



島根郡絵地図（文政7年〔1824〕、渡部彝作、個人蔵）